

---

# オーバータイム・エピック

白河黒船

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オーバータイム・エピック

### 【Nコード】

N4566Z

### 【作者名】

白河黒船

### 【あらすじ】

思いつきから訪れた小さな孤島。そこで伝説の勇者を祀る聖殿を発見した青年、レイリィ。ペインフォートは、石段に突き刺さっていた剣を引き抜いた。瞬間、仕掛けられていた魔法が作動し、時空を超えて勇者が召喚されてしまった。その正体は、レイリィと同じ程度の、何の戦闘力もない、ごく普通の女の子だった。王道異世界ファンタジー。（縦書きPDF推奨です）（タイトルは、まともなモノを考え出したときに変更します多分）

## 第一話『勇者の祠』

木々に閉ざされた小山。その道とも呼べぬ獣道を、一人の青年が歩いていた。

黒髪黒眼。この大陸には珍しい容貌の彼は、年齢にして十七、八といったところだろう。行く手を遮る枯れ枝を煩わしそうに払いながら、雑木林の奥を目指す。

辺りにひと気はない。けれど、森閑というには音に溢れていた。流れる風や、獣の息吹が、彼の住む都市部では味わえない地方独特の風情を醸し出している。

そんな雑木林の中を、青年はひたすら無言で進んでいた。白色系の肌には玉の汗が浮かび、黒の短髪には枯れ葉が付着している。けれど、青年はそれを気に留めもせず、ただ足を前へと送り続ける。

やがて彼は、僅かばかりに開けた場所へと出た。

「……………あつた」

呟く青年。

苦勞と疲勞を塗り隠す、目的に至った好奇と歡喜の色が、その黒い双眸に広がっていく。

青年の瞳に映るのは、何の変哲もない土壁だった。目前は崖のように土地が隆起しており、高さは優に青年の背の四、五倍はある。

何の心得も裝備もない青年が、素手で登頂するには厳しい険しさだ。もともと、青年の目的は壁を登ることではない。

彼は土壁へ手を当ると、撫ぜたり叩いたり、何事かを検分するかのような様子を見せた。

やがて、

「よし」

と、満足げに彼は呟く。

そして片手を土壁に当てたまま、彼は小さく息をついた。

「ふッ」

瞬間、彼の掌が黄色い光を発したかと思うと、土壁が音を立てて崩れ始めた。

それは魔法の行使を示す現象だ。

魔法学問の初歩の初歩。地属性の操作を応用して、青年は土壁を崩した……というより、穴を開けたのだ。自身の操作能力に、それだけ自信があったということだろう。

しかして。

土壁の奥には、小さな祠があった。

いや、祠というには、些かみすぼらしすぎるかもしれない。見た目にはただの洞窟、ないし横穴といった風情の場所だ。これといった装飾もなく、入口に至っては完全に崩壊し、土砂の壁となり果てていた。

しかしここは事実、ある太古の英霊を祀るがためだけに造られた空間である。

そのはずだった。

「《無名の勇者》、か」

青年の言葉。それは世界でも最も有名な伝承の登場人物を指した言葉だ。

遙か古の時代、この世界を救ったとされる名もなき英雄。

神々に賜ったとされる聖剣を手に、幾多の戦場を駆け、数多の魔物を狩り、遂には《最悪の天災》とまで呼ばれる魔獣　ドラゴンをすら屠ったとされる最強の勇者。

歴史というよりはむしろ神話、お伽噺の世界の住人とさえ思われている存在。

それを祀っているのが、この小さく寂れた祠である　はず、なのだ。

たぶん。おそらく。

誰からも忘れられ、その名さえ記録されておらず。しかし、確かに存在したと考えられることも多い勇者。幾つかの幸運、そこに持ち前の発想力と行動力を加味し、青年は忘らるる聖地を発見したの

だった。

「……いやはや。しかしまさか、本当に見つけてしまうとは……ふふ、さすが俺」

ふふ、ふ、ふふふふふ。

洞窟の入り口を前にして、つい不敵に、というか不気味に、青年は隠せぬ笑みを漏らした。周囲に人の目がないのをいいことに、いろいろとやりたい放題である。

だが確かに、ここが本当に《無名の勇者》にまつわる聖域ならば、これは歴史的な発見であると言えるよう。

「……しかし」

よく考えてみれば、そんな聖地（かもしれない場所）の付近を、魔法を用いて問答無用に破碎させてしまったのは、もしかしたらまづかったかもしれない。

いまさら手遅れだが。

「ま、埋まつてたのだから仕方ないな、うん。目的の達成には、多少の犠牲も必要だ」

いかにも三流の小悪党じみた台詞を誰にともなく吐いてから、彼はようやく足を動かした。

剥き出しの土壁や、立ち込める土煙、祠そのものが崩壊する可能性など、脳裡によぎる様々な雑音を意図的に無視しながら、祠の奥を目指す青年。

そんな彼の名を、レイリ＝ペインフォートといった。

用意してきた魔燈ランプに火を灯し、それを光源に祠を進む。

幸いにして、内部は存外に丈夫なようだ。

「というかコレは、魔法で形成されたんだろうな」

よほど造形系の魔法に秀でた術者が造った祠　レイリ的にはあ

くまで“祠”だ　なのだろう。歴史と神話を参照するに、千年以上は昔に掘られた穴のはずだが、さすがは伝説の祠である。魔法で入口を壊したくらいではびくともしない。というか、されたら生き埋めだから困る。

「いよいよ本物の可能性が強くなってきたな……！」  
にわかに興奮するレイリ。

そもそもそこまで古い横穴ではない、という可能性を頭から振り払って言う。彼としても、それなりの勝算と願望があつてやってきたわけだし、ここに来るにもそれなりの犠牲　たとえば親に秘密で学舎をサボったとか　を払っている。是が非でも本物であつてほしいという思いを、レイリはあえて口に出した。

言葉が事実に変われればいいと、小さな願いを託すように。

「……と」

言っている間に最奥へと到着する。

元より大した奥行きのある洞窟ではないのだろう。というか、祠が長くても参拝に困るだけだ。

「もっとも、誰も参拝になんて来ないわけだが……っ」と

光源を奥に向ける。短い洞穴だが、外の光は届いていない。

奥に見えたのは、祭壇らしき小さな石の段だ。

そこに、一本の剣が突き立っている。

「まさか……」

伝承にある聖剣だろうか。

だが、それにしてもどうにもボロボロだ。寂れ、錆びつき、鉄と  
いうより石に近い見た目をしていた。

神賜の聖剣、というからには当然、魔剣の類だろう。つまり、製造過程で特殊な魔法処理コーティングが施されているということ。加えて千年以上も過去となれば、現在では喪われた古代魔法アーキタイプの技法も残っているに違いない。さぞ素晴らしい名剣を打てたことだろう。

だが基本的に、歴史に名を残すほどの魔法処理コーティングを受けた武装は、  
経年劣化するということがない。事実、ただ一本の魔剣を何世代に

も渡り継承し続けている家系もあることをレイリは聞き及んでいた。まして伝説の勇者の武器ともなれば、たとえ一万年経とうが風化せずに残っておかしくない。むしろ錆びつくほうが不思議だとすら思う。

「……」

やはりそう簡単に見つかるはずもないのか　と、レイリは若干気落ちしつつも、改めて祭壇へと近づいた。

祭壇、というにはやはりどうにも貧相である。なにせ石の台が一枚敷いてあるだけ。面積だけ見れば五人は寝転がれる程度には広いが、かといって社らしい装飾はない。何らかの宗教的施設であることは間違いないだろうが、これが伝説の勇者を祀る聖殿かと思うと、どうにも残念な佇まいだ。

「ま、それもそうか……」

レイリは小さく零す。

《無名の勇者》に関して研究する者は少ないが、それでもゼロじゃない。幾人もの研究者が今日まで見つけれなかった遺跡を、自分のような若造が先じて発見することなんてあり得ないよな。

思いながらレイリは、持っていた魔燈ランプを床に置くと、背負った革袋から手袋を取り出し、両手に嵌める。勇者に関連する遺跡でないにせよ、これはこれで、未発見の遺跡のひとつではあるのだから。調べられることは調べておきたい。

もつともレイリは別段、遺跡発掘の専門家というわけではない。ただの学生であり、ほとんど教科書レベルの歴史知識しか持ち合わせはない。半ば自己満足とも言える作業だった。

レイリはまず、祭壇に刺さった剣の柄を手に握る。思ったよりは手応えがあった。少なくとも、多少動かす程度で崩れるほど脆くはないようだ。手袋越してはあるが、材質はやはり鉄よりも石っぽい気がする。

意を決し、レイリはその両手へ、ゆっくりと慎重に力を込めた。引き抜く。

す、と音も少なく、驚くほど手応えなく剣を引き抜くことができた、

その瞬間。

「な　！？」

突如として、床となっている一枚石に、淡い白色の光が浮かび上がった。

光は瞬く間に円形の足場を外周沿いに広がり、次いで中心　レイリの立つ目前、剣の刺さっていた場所を目掛けるように、複雑な紋様を描いて収束していく。

風と光が、狭い洞窟の中を乱れ回った。

「く……っ」

そしてそれ以上に感じたのは、膨大な量の魔力の流れだった。

レイリは咄嗟に悟る。

魔法が起動してる！？

だが、何が起こるかまではわからない。それは見たこともない魔法反応だった。

感じる魔力量は、レイリの総魔力量を遥かに超えて莫大。一流の魔法使い数十人分にも匹敵するほどの、恐ろしいまでの魔力の渦だ。レイリはその中心にいる。

「……<sup>リアクト</sup>畏か……っ！？」

不用意に手を触れたことを後悔するも、遅い。もはや退避は間に合わない。

収束する白光はレイリの直前でひとつの塊となり、魔力のうねりは最大に達する。刹那の後には術式が完成し、その効果が発揮されるだろう。

レイリは反応もできず、ただ光が飛び散るのを見ていることしかできないでいた。

そして。

次の瞬間。

レイリの目の前に、ひとりの少女が現れたのだった。

## 第二話『リンカ』

「は？」

間抜けな音が、喉の奥から零れ落ちた。

呆然と立ち竦むレイリ。目と口が皿になった。だって意味がわからない。

白光は既に空気中へと霧散して、あれほど高まっていた魔力の渦も、今ではその残り香さえ感じ取れないほどだ。

世界は、何事もなかったかのように元の静かな穴倉へと戻っている。

にも、かわからず。

「……………、え？」

目の前にはひとりの少女。

石の祭壇に座り込み、きよとんとした表情でこちらを見据えている。

年の頃は、恐らく自分と同程度だろう。身にまとう衣は、服というより布といったほうが適切なほど質素で、年季の入った汚れが染みついている。また肌も爪も土に汚れているが、かといって不健康に見えるというわけでもない。肌はほんのりと赤みをもって瑞々しいし、身体つきも、華奢ではあるが痩せ細っているというほどではなく、レイリは「田舎の農家の娘のようだ」という印象を抱いた。

だが。その印象を大きく裏切る要素がひとつ。

少女の外見で何より特徴的なそれは、透き通った白い長髪だ。

土汚れに塗れた彼女の全身で、その髪だけが唯一、清潔な感覚を抱かせる。まるで穢れに触れたことのない処女雪のような。そこには、見る者の目を奪う聖性があった。

つぶさに少女を観察するレイリ。

その黒瞳が、少女の黒瞳と見事に交錯した。

「つと、済まない」

咄嗟にレイリは謝罪を述べる。

初対面の人間の顔を凝視するなど、かなりの失礼だと言えよう。何であれ礼儀を欠くのは、レイリの主義に反する。

「あー、……えっと。言葉わかるか？」

気を取り直し、レイリはまず、彼女にそう問うた。

問いには理由があった。少女が、この国の人間ではない可能性を考えたからだ。

レイリの国の人間にも黒眼の者はいる。しかし、黒髪は珍しい。まず目に掛けることはない色だ。

だが、白髪しろかみはそれに輪をかけて稀少だ。

というよりも、より正確に言えば、レイリの暮らす西の大陸、《ユールティリーフ》に、白髪で生まれる人種は存在しない。

白髪の特徴とするのは、この世界でただ一国。

東の大陸の、《サス》という国の出身者だけだからだ。

もし彼女が東の大陸の人間であるならば、ユールティリーフ大陸の公用語は通じない可能性がある。それをレイリは危惧していた。

レイリはサスの言葉を知らない。

果たして、少女は答えた。

「えっと……はい。わかり、ます」

頷いて言う。多少たどたどしくはあるが、訛りはない。完璧な発音だった。

「そうか、よかった」

言葉が通じることにとりあえず安堵しつつ、レイリは重ねて訊ねる。

「立てる？」

「あつと……大丈夫、です」

レイリは立ちあがろうとする少女に手を貸し、石段の上に立たせる。

土を払うようにする少女を（あんまり意味ないだろうと思いつつも）見やりながら、レイリは続け、問いを投げた。

「それで、君は……？」

曖昧な問い。これにどう答えるか。レイリは注意深く様子を見る。別段、この少女を危険視しているわけではない。もし危険な存在であれば、最初の瞬間に危害を加えられていただろう。そこは特に心配していない。

だが、疑問視はしていた。なぜこんな場所に、突如として現れたのか。そもそも何者なのか。疑問は多く、考えてもまるでわからない。

それを踏まえての質問だった。

「わたしは……」

言つて、少女はしばし逡巡する。

単純に、なんと答えたらいいのかを迷っている風情だ。

「わたしは、リンカといいます」

やがて、少女は名を名乗った。

見たところ、少女自身、現状に困惑している様子だ。何らかの事故に巻き込まれたのだとしたら捨て置けない、とレイリは思索を重ねる。

ともあれ、これ以上礼儀は欠きたくない。レイリも名乗りを返す。

「俺はレイリ。レイリ＝ペインフォートという」

「へええ。そうなのですか」

少女　リンカは、なぜか妙に驚いたような声を出す。

「どうかしたか？」

「いえつ。姓があるということは、もしかして貴族様かと思ひまして」

「貴族……？」

質問の意味がわからない。

姓なんて、どこの誰でも持っている。サス帝国では貴族しか家名を持たないのかも考えたが、レイリの知る限り、そんなことはなかったはずだ。

「……別に、俺は貴族じゃないんだが」

「え？ そうなんですか？」  
やはり驚くリンカ。

「どうも、何かが食い違っているような……？」  
微妙な違和感をレイリは抱く。

「で、リンカはどうしてここに？」

「……わかりません。さっきまで村にいたと思うのですが……」

「村か。なんて村だ？」

「いや、名前なんてないですけど」

「……………」

「あ、でも、村のみんなは《破片の里》って、たまに言いますね。  
外の人には」

レイリには聞き覚えがなかった。

そもそも村の名前がない、という時点でレイリの常識を逸脱していたが、破片の里、という呼び名もまた奇妙な命名だ。そんな風にあだ名される村が、この近くにあったらどうか。

「……君は、もしかしてサスの人間か？」

「ようやっと、レイリはその質問に辿り着いた。」

「けれど、もしそうならば困ったことになる。というのも、サス帝国は現在、一港を除いて鎖国状態で、対外的に緊張状態にあるからだ。」

さらに言えば、人ひとり分もの質量を持つ物体を、国を超え海を越え、ここまでの長距離で移動させる魔法など、レイリには想像もつかない難易度の技法だ。まして術者がいない状態で発動するなど。そんな術式が実在したら、文字通りに世界が動くだろう。

「そうなれば、事態はもはやレイリの手にも余る。」

「けれど、」

「さす、って何ですか？」

少女の回答は、レイリの想像の遙か埒外からやってきた。

「何、って……」

まさか、そんな部分を訊ね返されるとはレイリも思っていなかった。まるで想定外だ。

「……サス、ってのは国の名前だ。サス帝国。東の大陸にある」「……？」

聞いたこともない、とばかりにリンカは首を傾げる。

レイリは頭を抱えた。

サスの名を知らない？ いるのか、そんな奴？ 学校に通ってないのか？

疑い、しかし田舎のほうには、もしかしたら貧しく学校に通えない人々がいるのかもしれない、と思い直す。名のある大商人の家系に生まれた自分<sup>レイリ</sup>には、知り得ない世界があるのかと。

だがそれにしたってサスを知らないとは

「あのっ、レイリさんっ！」

と、リンカが口を開く。どこか勢い込んだような、力の入れ方を間違ったような口調だ。

顔の動きに合わせ、リンカの髪が小さくなびく。どこか柑橘の類を思わせる淡い香りが、レイリの鼻孔をくすぐった。

服は汚れているが、これは農作業でもしていたのだろうか。

思いつつ答える。

「何だ？」

「わたしからも聞いていいですか？」

「ああ……構わないが」

「では。ここはどこなのでしょう？」

ふむ、とレイリは無意識に顎へ右手を当てた。考え込むときの彼の癖だった。

やはりリンカは、自分の意志でこの場へやってきたわけではないようだ。嘘をついていると疑うこともできるが、恐らくは信用できる。そも嘘をつく理由が見当たらない。

と、いうか。

これもしかして、俺のせいで巻き込まれたんじゃないか……？  
苦い想像がレイリの脳と心臓を刺した。グサツと、こっ、イメー  
ジ的に。

もし自分が不用意に剣を握ったせいで、なんだかよくわからない  
古代の魔法が発動して、リンカを事故に巻き込んでしまったのだと  
したら

「やべえ、アルナに殺される」

「は、はい？」

「ぬ、ああ、済まん。ここがどこか、だつたな」

レイリは頭を掻いた。

思考に没頭すると、すぐ周りが見えなくなる。その集中力は、彼  
の長所であり、同時に欠点でもあった。

ともあれ、とレイリは説明を始める。

「ここは《ヴロウフォーク王国》の南東にある、《スタツ島》って  
いう小さな島だ」

「……聞いたことないです」

「まあ、私有地だし、ほとんど無人島みたいなものだ。無理もない。  
ここから一番近い街となると、俺が住む」

「あ、いえ、そうじゃなくてですね」

レイリの言葉を止めるリンカ。

形のいい柳の眉を困惑に歪めて言う。

「そもそも、ヴロウフォークという国を知らないのですが」

「……………」

「どうでしょう困りましたっ。わたしは知らない間に、知らない  
外国へ来てしまったのでしょうか？ 午後のお仕事が、まだ済んで  
いないのですが……………」

心底困った風に言うリンカ。

だがレイリは反応もできず、ただただ絶句していた。

ヴロウフォークを……………知らない？

信じられない、とレイリは思う。

ヴロウフオーグは世界で最大の国だ。面積ではなく、その文化と繁栄が。最盛大陸と名高いユールティーフの中で、さらに最盛を誇るヴロウフオーグ王国。自身が生まれた国だから、という理由だけではなく、客観的に考えて知らないなどあり得ない。

「おまえは……どここの国の出身なんだ？」

「わたしですか？ 亜国です」

「ア国？ 知らないな、どこにあるんだ？」

「え、知らないんですか？ 結構大きな国だと思うのですが」

「あれ。どうされました？」

「何が。」

何かが致命的に噛み合っていない。そんな危惧をレイリは抱いていた。

レイリは脳を回す。顎へ当てた右手に力が籠もった。

だが、そのせいか。逆側の手がおろそかになり、支えていた石剣が重心を崩して倒れてしまった。

ガギン、と硬質な反響音を立てて石畳に跳ね返る古剣。

「あ、危ね……」

「剣ですか？ なんだか石で出来てるみたいですね」

取り落とした剣を、代わりに拾おうとリンカが手を伸ばした、

そのときだった。

リンカの指が剣に触れた瞬間、突然に剣が、眩いばかりの白光を発し始めた。

「わわっ!?!」

「な、」

先の魔法反応と同じ気配。

だが質は同じでも量が違う。先程の仕掛けを遙かに上回る、もはやレイリでは測りきることができない規模の魔力が、剣を中心に駆け狂っていた。

驚愕の間もあればこそ、石の剣が徐々にその外殻を剥ぎ落していく。

光に眩む目を必死に凝らしながら、レイリは正面に目を遣った。

「おい　リンカ！　大丈夫か！！」  
叫ぶ。

濃い魔力の暴風に押され、レイリには立っていることしかかかない。

「大丈夫ですっ！」

強い声が返ってくる。

「でも　剣が！」

逆光の中に覗ける剣は、まるで魚の鱗が削られるように、ぼろぼろとひび割れ、崩れていく。

その奥に、別の輪郭が見えた、気がした。

やがて、

光が止み始める。同時に魔力の暴走も終了し、また先程と同じように、全てが静寂の中へと舞い散り、還元されている。

レイリの視界も、元の薄暗い洞窟の内部へと巻き戻っていた。

「……なんだったんだ」

治まったらしき現象に、レイリはようやく息をつく。終わってみればそれは、わずか数秒程度の出来事だった気がした。

「リンカ、」

無事か、と声をかけようとして　止まる。

彼女が腕の中に握る、一本の剣を、その目に捉えたからだ。

「なんだか、剣が変わっちゃいました」

リンカの端的な報告が耳に入らない。

それだけ、目の前の剣はレイリの目を奪っていた。

両刃の直剣。純白の刀身が湛える聖性が、この世のものとは思えない美しさを醸し出している。華美でありながら、同時に堅牢さも窺える拵えは、それがただの装飾剣ではなく、強大な力を秘めた魔

剣であることを示している。

いや、魔剣というより、むしろこれは

「……聖剣だ」

「はい？」

「これ、本当に聖剣だったのか……！」

レイリの家は商家だ。さすがに数は少ないが、商いで魔剣を扱うこともゼロではない。その経験からレイリは悟った。その聖剣が、間違いなく本物であると。

「あの……レイリさん、どうかしました？ これ、大切なものでしたか？」

「……」

となると、不思議なのはこの少女のほうだ。

ただの古臭い石剣と思われたものが、彼女が触れた瞬間に真の姿を取り戻したのだから。

「えと、あのつ、ごめんなさいっ！ 変えるつもりはなかったと言いますか、わたしにも何が何だかわからなくてですね」

「あ、いや、……それはいいんだけど」

黙り込むレイリを見て、怒らせたかと思ったか、リンカが慌てて頭を下げている。

その姿を見ながら、レイリはひとつの仮説を築いていた。

突飛な発想だ。真顔で語れば、精神の不調を危惧される類の考えだ。だが彼には、それ以外につけられる理屈が見当たらない。

レイリは、それを口にする。

「リンカは、もしかして 勇者なのか？」

「え？」

驚いたように目を丸くするリンカ。

そうしてから小さくはにかみ、

「そんなこと、初めて言われましたよう」

えへへ、と。照れたように頭を掻いた。

ああ、なんか可愛い娘こだなあ。

と。そのときのレイリは、そんな風に、酷く間の抜けたことを考  
えていた。

馬鹿だった

### 第三話『アルナ』

スタツ島は小さな島だ。

半径にして五料<sup>キロ</sup>ほどの、円形に近い孤島。元は無入島だったのを、とある地方の豪族の当主が買い取り、別荘とした。ユールテイリーフ本土から二十数料<sup>キロ</sup>程度の距離でしかなく、また気候もいいため、避暑の立地としてはなかなかの場所だ。が、いかんせん島の半分以上を小山に近い丘陵が占めているため、鬱蒼と生い茂る雑木林が人氣を下げ、買い手がつかなくなつたらしい。それを安く買い叩いたというわけである。

だが海岸近くに屋敷が建てられた今でも、その裏山は手つかずのまま放置されている。結局、別荘としての使用頻度もそう高くはならなかつたようだ。

レイリはそこに潜り込んだ。

スタツ島を購入した財産家、その家の息子が同じ学校に通う同級生であつたという幸運を大いに利用し、島へ滞在する許可を取り付けたのだつた。

ひとまずの仮説を得たレイリは、リンカと連れ立って小山を下りることにした。

本当は単に、脳の容量が限界に近づいていたからかもしれないが、考えるべきことは山ほど考えつくが、いざ考えようとすると、精神のほう<sup>ほう</sup>がそれを拒否してしまふ。答えを出せる気がしない。場当たり的に、とりあえず麓の屋敷へ戻ろうとしただけだ。

道中はこれといった詮索もせず、適度に気を使いながら歩いた。

山、というと大層に聞こえるが、実際はそう険しい道のりではない。事実、レイリも大した装備はしていない。

とはいえ、ほぼ手つかずの原生林だ。道らしい道は皆無だし、女性には少々大変な道行きかもしれない。とレイリは危惧した。

結論を言えば杞憂だった。リン力は見た目よりもずっと運動能力がある。彼女はレイリの代わりに聖剣を運んでいる。見た目が変わって以降、なぜかレイリが触れようとすると、雷のような白い光に手を弾かれてしまう。のだが、特段剣を重たげに扱う様子はない。むしろ結構な余裕すら見て取れる。

ともすれば、体力は俺よりあるかもしれないな。

などと微妙に情けないことをレイリに思わせる、その程度には確かな足つきだった。

ともあれ、迷いながら歩いた往路より、むしろ断然速いくらいのペースで二人は歩みを進めた。

やがて林を抜け、海岸へと抜ける。

そうして辿り着いたのが、レイリの滞在する屋敷だ。

「わああー……」

感嘆したような溜息を零す上げるリン力を尻目に、レイリは後のことを思考する。

屋敷に島の持ち主はいない。いるのは管理を任されている、老年の男が一人だけだ。雇い主とは無関係なレイリにも丁寧に接する気の良い老人ではあるが、さて、果たしてどう言い訳をすればリン力の存在を誤魔化せるだろうか。レイリは頭を悩ませる。

している内に、目の前の玄関の扉が開いた。

柔らかかそうな茶色の髭と、対比的に寂しげな禿頭が特徴的な、人当たりのいい老夫。この離れ小島の管理を任されている男で、元々は執事をしていたらしい。

「これはペインフォート様」

「どうも。島を散策させてもらいました」

「それはそれは。自然しか取り柄のない島ですが、退屈ではございませんでしたか？」

「とんでもない」

レイリは笑顔で返す。

「退屈どころか、むしろ。」

「それで」

と、老執事がレイリの後方へと目を向ける。

「そちらの方は？」

「……」

さて何と言いついたものか。レイリは脳を鞭打って回す。

いきなり出てきてしまったため、まだ何も考えられていない。そもそもレイリとしても、いきなり人間が転移してくるなんて事態に決して少なくない混乱が身体の中で渦巻いている。そもそも転移魔法というものは、かなり希少な属性だ。個人でそれを行使できる魔術師など、世界に五人もいないだろう。無論、術式を目の当たりにするのは、レイリにとっても初めての経験だった。

まして。

これはただの空間転移ではなく、ともすれば。

「ふむ、お迎えは二名だったようですね」

と。

逡巡するレイリが口を開く前に、老執事が何かを納得したように頷く。

「お迎え……？」

「ええ。アルナ様、と名乗られる方が、先程ご到着されました」

瞬間。

レイリは、自身の呼吸と脈拍が、停止したかのような錯覚を得た。

「アルナが……来てるんですか？」

「はい。お聞き及びではないのですか？」

「いえ……」

レイリの言葉が震えている。

顔色は蒼白を通り越し、もはや透明の域に至りつつあった。

奇妙すぎるレイリの様子を、さすがに怪訝に思ったか。老執事は僅かに胡乱げな表情を見せたものの、しかし詮索はせず、

「……お入りになられますか？」

とだけ、問うた。客人の事情を無闇に詮索しない、それは現役時代の名残でもあった。

その姿勢と、この島へレイリを迎えに来たという存在が、レイリにとっては幸運な勘違いを招き、屋敷の管理人へ、リンカのことを誤魔化す必要もなくなった。

しかし。

その『迎え』の存在が、本当にレイリにとって幸運なものだったのかどうかは、まだ、確定したとは言えないだろう。

アルナ、という名の女性は、奥の応接間でレイリを待っていた。ただ無表情に。椅子に腰かけることもなく。直立不動で待ち構えていた。

老執事は既に、仕事があると他の部屋へ消えている。

無言のままレイリを見据える彼女を一目見て、まず口を開いたのは、リンカだった。

「わわ。メイドさんですっ」

憧憬の垣間見える視線。それを見て、アルナの表情が僅かに揺らいだ。

しかしすぐに元の鉄面皮へと顔を戻すと、彼女は無言のまま、まっすぐにレイリの顔を睨みつけてきた。もとい、見据えてきた。

レイリはただ苦々しげに表情筋を引き攣らせる。

「……まさか、こんなところまで追いかけてくるとはな。いや、さすがだ」

「……………」  
驚きと呆れの混じった称賛を受け、なおアルナは無表情を崩さない。

彼女は、レイリの実家であるペインフォート家に仕える家政婦

つまりメイドだ。

元々はレイリ自身が拾ってきた。それも言葉通りの意味でアルナだったが、弛まぬ研鑽と経験を積んだ結果、今では当主直属の立派な正メイドとなっている。

もつとも未だ、実質的にはレイリの専属と考えて間違いないような立ち位置ではあった。

故に本来、レイリが彼女を恐れる理由などないはずなのだが。

「さて　レイリ様」

ようやく、アルナが口を開く。凍えるような声色で。

栗色の髪と、その上に鎮座するメイドのあかしが、なぜかレイリには輝いて見えた。……ただし白じゃなく、紫とか黒とか、そんな邪悪な色合いに。

「弁明が、ありましたならばお聞かせ願います」

透き通る蒼眼が、貫くようにレイリを見通す。

レイリは今回、この島へ来ることを、家族の誰にも話していない。なぜなら今は、休暇でもなんでもない春の平日で、彼の身分は学生だったのだから。

つまりは無断欠席。

「しばらくは友達の家で過ごす」と。偽証を用意し、方々に根を回し、ばれぬよう悟られぬよう、再三の準備と細心の注意でもって、彼は今回の冒険に臨んでいた。

それがまさか、一日で追っ手に見つかるとは……。

これはレイリも舌を巻かざるを得ない。

すぐに見つかるとは思っていた。忙しい父と暢気な母よりも、このメイドのアルナが最大の障害になるとも理解していた。

だがよもや、滞在一泊で居場所が割れるとは考えていなかったのだ。三日は誤魔化せる計算で、ばれる頃には帰還している計画だった。

「ふう」

と、レイリは溜息をつく。

呼吸を整え、これからの弁明　　いやさ討論　　むしる戦争  
に備える。

「さて、アルナ。まあ聞いてくれ」

「聞きません」

「実はだな……って、おい」思わずノリツツコミを決めるレイリ。

「今、弁明があるなら聞かてみる、って言ってなかったか？」

「言ってみただけです、聞く耳持ちません」

「……えええ」

「まさか、こんな離島に女性を連れ込んで乳繰り合うために学舎を  
休むなんて……許し難い愚行と言わざるを得ません」

「待て、言い訳をさせる！」

叫ぶ。叫ぶしかない。

とんだ誤解だった。まさかいきなり変態扱いをされるとは。

「仕方ないですね。聞くだけは聞きます」

「……その、だな。アルナ、《無名の勇者》の伝説は知ってるよな」

「はい。それが？」

「実は……」

ちら、と横目にリンカを見遣るレイリ。

彼女は剣を抱いたまま、きよとんと首を傾げていた。

剣には鞘がないが、抜き身では危険なため、今は裂いた布を巻き  
付けて誤魔化している。

「実は、彼女がその《無名の勇者》なんだ」

「旦那様へ報告させて頂きます。レイリ様が、女性を島に連れ

込み勇者プレイにうつつを抜かしている、と」

「待て！　いろいろと待てっ！！　てか勇者プレイって何だ!？」

「世に名高いペインフォート家から、よもや性犯罪者が出てしまう  
なんて……。これも私の不徳のなすところです。よよよよよ」

「アルナおまえ、わかかって言ってるだろう」

「では納得のいくご説明を」

す　、と一歩踏み出して、アルナ。

その蒼い瞳が一分だけ、レイリの黒い瞳へと近づいた。

「……………」

一見光のない双眸の奥に、彼女が多彩な感情を秘めていることをレイリは知っている。

だからレイリは、アルナのことを苦手だった。

目を覗かれると、嘘をつけなくなるから。

「私に嘘はつかないでください」

「……………」

レイリは静かに溜息をつく。

いつも思う。これ、主従が逆転してないか、と。

だからレイリは、アルナのこと苦手だったし。

だからレイリは、アルナを誰より信頼していた。

孤児だったアルナを、無理やり屋敷に引き連れて来た　そのと

きから。

初めから、アルナを嘘で誤魔化すつもりはない。協力してもらうつもりならあっても。

まったく、付き合いが長いというのも面倒なものだ。

レイリは胸の中で、そう嘯いた。

「順を追って説明するから、とりあえず話を聞いてくれ」

眼を見て告げる。

「わかりました」

アルナの瞳の彩りが、僅かに変わったことにレイリは気づいた。

彼女は頑固だ。だから、納得しなければ主の言うことさえ聞きやしない。とんだメイドだ。

だが、どうやら一定の理解は引き出せたらしい。

レイリは備え付けのソファアへどつと腰下ろすと、ふと思い出したように口を開く。

「あー、その前に」

視線はリンカ。

会話についてこれず、おろおろと視線を揺らしている彼女を見て、

一言。

「そのリンクに、シャワーを用意してやってくれ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4566z/>

---

オーバータイム・エピック

2011年12月17日01時05分発行